

対話の記録

座談会「いま、必要な場所」

対話の記録

座談会「いま、必要な場所」

2019年4月28日

ひらくカフェ（水戸芸術館現代美術ギャラリー 第1室）

進行：竹久 侑（水戸芸術館現代美術センター 主任学芸員）

前座：森山純子（水戸芸術館現代美術センター 教育プログラムコーディネーター）

発表者：小山田 徹（美術家）

久保田 翠（認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ代表理事）

砂連尾 理（ダンサー／振付家）

横須賀聡子（310食堂実行委員会共同代表／NPO法人セカンドリーグ茨城理事長）

参加者：57名

第Ⅰ期の会期終盤、各地で社会的なつながりの場を設けている4名の方々をお招きし、今、社会に必要な場、そして、アートセンターに求められる役割について市民とともに語り合う場を開いた。

冒頭、まず本展企画者である竹久が「アートセンターをひらく 第Ⅰ期」の趣旨を説明したあと、当センターで教育プログラムを担当している森山と、当センターにおける場づくりの事例として「高校生ウィーク」と「ひらくカフェ」について対談を行った。つづいて、お招きした4名の方々に各自の活動をご紹介いただいた。後半のラウンドテーブルは、オーディエンスと発表者を区別せず、集まった人たちみんなで「いま、必要な場所」について問い直すところから始めた。

ここでは、前半のプレゼンテーションを要約し、後半のラウンドテーブルは発言の多様性を担保するため、要約せずに文字起こしを整理した形で記す。

「高校生ウィーク」から「ひらくカフェ」へ

森山純子

竹久 侑

森山：「高校生ウィーク」は、水戸芸術館が開館して3年後の1993年に始まりました。1990年代はハイティーン向け年間パスの販売促進の一環として、高校生がギャラリーに無料で入れるというシンプルな企画でした。1999年になると、近隣の高校生とスタッフでポスターをつくり始め、高校生自身が活動の主体となりました。すると、参加者から他校の生徒やいろんな大人たちと交流できて面白いという声が寄せられると同時に、エコ活動やホームレスへのインタビューなど

を始める人もいて、いろいろやりたいことがあるのがわかってきました。そこで、2004年、その交流や活動の場をワークショップ室全面に広げ、「カフェ」を始め、今年で15年目です。今回は、ギャラリーの第1室という真っ白な大きな空間で行っているのですが、どれだけマーキングできるか、「自分たちの空間」として使っていけるかをいろいろ試みています。

竹久:例年は、ギャラリーの一番奥にある、今回は「工房」と呼んでいるワークショップ室でカフェを開きます。それを今回はギャラリーの玄関口に移したことで空間が広くなりました。そこで、子どもたちが大きい紙に思いっきりお絵描きしたり、赤ちゃんがはいはいできる場所と授乳室がある「かぞくエリア」、それからみなさんが今いる「フォーラム」を設けました。カフェにいろんな目的でやってくる方たちが共存でき、かつ、かしまらずに話し合えたり、たまたま居合わせてみたら面白いという人がどんどん参加していけるような、オープンな対話の場がほしかったのです。

森山:「居合わせてしまう」というのは、「高校生ウィーク」でも起こっていたことですね。もうひとつの特徴として、何もしなくてもいいし、1人で本を読んでもいいし、つながって何か「部活動」を始めてもいい、思い思いに過ごせるというのがあります。今年は広い空間だったのでそれが見えやすかったと思います。

今年は、親子連れがとても多く、またカフェ・スタッフも「高校生ウィーク」という枠を取り扱ったので10代から60代ぐらいまでのボランティアの方たちでカフェが運営されています。こうした多世代の場が実現した一方、以前、竹久さんが言っていた「高校生ウィーク」のアジール感は薄まったかな、と。このように開くことで居心地が悪くなるという人たちもいて、開くと閉じるはセットで絶妙なさじ加減によって居心地が保たれること、そしてすべての人に対して開くことの難しさもわかりました。

今回、カフェにフロアマップとたくさんのリペアされた椅子がたくさんあるのですが、これらはそれぞれかつてカフェで過ごした高校生たちが社会人になって今回の場づくりに携わってくれた一例です。カフェに関わった方たちが、水戸から離れても自分たちのまわりをよくしようと活動しているのを多く見かけます。アーティストを介して新しい視点を得て世界を広げつつ、またここに来場されるみなさんが美術館やアートセンターの活動や次の形に関わってくださることはとても大切です。そして、美術館は全ての人には必要でないかもしれませんが、ここがあるので先に進める人がいるということ、それを多くの方たちに伝えていくのも私たちの大きな仕事の開くひとつだと思っています。

「障害のある人たちの存在を顕在化し、さまざまな人々がともにいる社会をつくる」

久保田 翠

福祉制度が充実していなかった1990年代後半、重度の知的障害がある息子が誕生したことで、仕事を辞めて子育てに専念するしかなくなりました。すると、家にこもる時間が増え、おのずと社会から周縁化していく感覚をもちます。それに対して家族が安心していられる場所をつくろうと、障害のある子をもつ母親たちと2000年に活動を始めました。障害者がまるで隔離されているかのように、ふだんその姿を見ることのない社会の不自然さに抗い、どうにかしてさまざまな人々がともにいる社会をつくることを理念に掲げました。

活動においてアートをひとつの切り口にするのですが、アートなのか福祉なのかと常に問われ明確な答えが出せない中、2008年に「たけし文化センター」というコンセプトに行き着きます。それは「重度の障害のあるくぼたたけしという1人の個人の示すやりたいことをやりきる熱意を、新たな文化創造の軸と据える」というもので、たとえ問題行動とされる行為であっても、その人が好きなことをすることを認める文化を培おうというものです。2010年にはそれをコンセプトとした障害福祉施設アルス・ノヴァを設立しました。障害福祉施設といっても作業などはなく、あくまでありのままであることを大切にしています。

最近、障害者によるアートが注目されていますが、作品をつくるというより、自分を表す方法としての表現を大切にしようと「表現未満、」という活動を行っています。その中のプロジェクトとして、障害のある人ととにかく接してもらおう1泊2日の滞在「タイムトラベル100時間ツアー」や、障害のある人たちが出張する「貸し出したけし」などを実施しています。そして昨年、浜松の中心市街地に重度知的障害のある人たちの文化創造発信拠点「たけし文化センター連尺町」をつくりました。重度であっても社会の隅に追いやるのではなく彼らの存在を知ってもらい、地域での共存を図っています。障害のある人たちの居場所づくりから始まり、安心していられる場ができた今、どう社会に揺さぶりをかけるかを考えつづけています。

「共有空間の獲得」

小山田 徹

私は「共有空間の獲得」を主なテーマとして活動をつづけています。もともとはパフォーマンス・グループ ダムタイプの創立メンバーとして活動し、長く舞台監督も務めていましたが、メンバーの1人がHIVに感染したため、エイズについて考えざるを得なくなり、みんなで悩むために「アートスケープ」という場をつくりました。ここではジェンダーや性産業にまつわる議論が活発に行われ、いくつかは市民活動にまで発展していきましたが、活動が専門的になるにつれ、誰に対してもオープンであったはずの場に「目に見えない敷居」が生じ始めました。なんとかそれを解決したくて、新たに隔週土曜日にオープンするオールナイト・バー「ウィークエンドカフェ」を1993年から1996年にかけてつくりました。ここでは誰もが自由にマスターになれる制度をつくったことが功を奏して、訪れる人がみんなそれぞれに、このカフェを自らの居場所として獲得していったと思います。

場を展開していくために有効なツールは何か。これまでに試行錯誤をつづけてきて、今もっとも有効だと考えているのが焚き火です。焚き火があると、人が自然に集まり、自己紹介をとばしてさまざまな話が始まります。焚き火を使ったプロジェクトはいくつか進行していて、東日本大震災以降、宮城県沿岸部の女川町で現在までつづいている「女川常夜灯」プロジェクトもそのひとつです。これは、津波で家を流された人たちが、かつて自分たちの家があった場所で「迎え火・送り火」としてたくさんの小さな火を焚き、地元の人々に外からの来訪者も加わる形で語り合うというものです。焚き火が震災を語り継ぐためのツールとなり、つづいています。近年、野焼きは法律で原則禁止されていますが、アートプロジェクトや宗教行事として位置づけ、近隣住民の理解を得ることで、許可がおりることが多くあるんです。

また、「アート」ではありませんが、今、パートナーと公文教室を共同運営していて、その待合で私自身が料理しながら生徒やその家族と話をしたり、スタッフたちと食卓を囲んだりすることで、「家族を拡大すること」や、「閉じない家庭や家族をつくること」にも取り組んでいます。

「コミュニティ・キッチンを通して、街を大家族にする」

横須賀聡子

「310食堂」という、月に一度開く食堂をやっています。商店街の会長から「やりたい」という話があったのがきっかけです。以前から、子育て支援のNPOをしていたこともあって、子どもの貧困について考えてきました。ですが、中心市街地では、子どもだけでなく、圧倒的にお年寄りの孤食が多い。そこで、子ども食堂ではなく、310食堂として実施することにしました。

まずは、親しみやすいロゴをつくって旗を立て、助成金を申請しました。ところが、食べることには意外にお金がかからないことが判明します。フェイスブックに必要なものをあげると、たちまち食材を提供してくださる方が現れ、食器も大量に集まり、なんと4升炊きのガス釜まで無料で提供いただきました。ボランティアについても、小学生から70代のお年寄りまで、私の知らない人たちがいっぱい集まり、どんどん入れ替わっていきます。出欠をとらないので、当日食堂が開くまで誰が来るかわかりません。みんながボランティアでフラットな関係ですし、役割分担はしないと決めていて、自分が気づいたことをやるというスタイルでやっています。

もうすぐ2年になりますが、ボランティアが来なかったことも、食材が集まらなかったことも、ご飯ができなかったことも、今までに一度もありません。おそらく、みんなが310食堂を自分の場としてとらえ、自分なりに関わってくれているからだと思います。誰かが決めた役割を担うというのでは、なかなか自分の居場所という感覚には至りません。やってみてわかったのは、誰かの役に立ちたいと思っている人がたくさんいることです。自分で考えて決めてやっていると、きっとそこがその人の居場所になるのだと思います。

310食堂がやっているのは、コミュニティ・キッチンとして「街を大家族にする」ということ、それだけです。一緒にご飯を食べて、ひとことふたこと話す。どこかでまた顔を合わせる、お辞儀をする、そういうところから小さなつながりを重ねていく。「誰かが誰かに何かをしてあげる場ではない」ということだけは、すごく大切にしています。できる人が何かをやる、できるときになったら、今までやってもらっていた人もできることをする。支える側でも支えられる側でもない、一緒にこの街で暮らす家族になれたらと思って、これからもつづけていきます。

「いかにして身体が場をつくり、開いていくか」

砂連尾 理

僕は、コンテンポラリーダンスをやっています。ダンスを始めたのは、受験戦争を頑張って入った大学で新たな場所を獲得しようとしたことがきっかけです。ところが、ダンサーになると、支援してもらうためには毎年新作をつくらなければならない。これは受験戦争よりもっと厳しい。そこから逃れようと、43歳でベルリンに渡り、1年住みました。そこでは、劇場が、カフェが、人と対話する場所が、とても身近にありました。

同じような場を求めて日本に戻り、公共ホールを身近にしようと市民の人たちと出会う場をつくっていく活動をしていた矢先、東日本大震災が起こります。震災を機に、共同生活のスキルを身につけておく必要性を感じて、2012年から東北の避難所で過ごした人たちに避難所での生活について聞くことを始めました。それが宮城県名取市での「カモン！ ニューコモン！」というプロジェクトにつながり、「新しい公共」について地域や公共ホールの人たちと一緒に考えていくこととなります。そこで新しい葬式のあり方についても考えていたのが、2014年から2015年のことです。

その時期と並行して老人をパートナーと一緒にダンスを始めました。ところが、2016年にその方が高齢のため亡くなり、その1週間後には、私の父が末期癌と診断されます。癌の転移で視力を失い、父が障害者になった。その局面で、僕は、子どもが社会のものであるならば、老人も社会のものと考えられないかと思いました。そこで、「家族の模様替え」というプロジェクトをジャワ舞踏家の佐久間新さんと始めます。老いて病を抱えた親同士をいかに共有していくか。障害や老いとは、ひとつの個性であり、身が変わっていくプロセスである。ただ、概念ではわかっていながらも、身体的に定着させるのはなかなか難しい。そこで、こうして変化していくプロセスをともに考える場をつくらうと、2018年、「カフカの『変身』から考える生の揺らぎ」というプロジェクトを信州大学、立教大学とともに行いました。そこではトランスジェンダーや怪我なども「変身」ととらえました。それが水戸芸術館へとつづいています。

「必要な場所」というとき、僕はダンサーなので、その場とは自分の身体であると思っています。身体がどのように場をつくり、開いていくか。最近わかったのですが、僕、甲状腺が少し悪いんです。だから、無理ができない。であるなら、いろんな人に助けをもらい、必要な場をつくってもらえばいいのではないか。誰とでもやっていける場所を獲得する身体をどう獲得するか、自分の弱さを自覚しながら助けをもらう、その延長線上に答えがあるのだろうと思います。



「いま、必要な場所」ラウンドテーブル

竹久:ここからのラウンドテーブルは、哲学カフェをまねる形で行いたいと思います。発表者の話を聞くという回は前半で終わりましたので、ここからはみなさん同じ立場で、ひとつの問いに対して言葉を重ねていくような、考えを深めていく場になればと思います。発言にあたって自己紹介や肩書きは必要ありませんので、みなさん対等な一個人としてご参加いただくということをご了承ください。

それでは、まず座談会のそもそものテーマに戻りましょう。「いま、必要な場所」とは何か、という問いを立てるところから対話を始められればと思います。すでに前半の活動紹介の中で、出てきたキーワードがいくつかありました。久保田さんからは「障害のある人もない人もともにいる社会」という言葉があったと思います。みなさんが思う「いま、必要な場所」というのはどのようなところでしょうか。

いま、必要な場所とは？

久保田:「生き延びる」というのはありますよね。

砂連尾:切実にどんな人も生き延びる場所っていうか、今それぐらい断絶されているんじゃないかと思ったときに、たぶん縦のつながりじゃなくて、横をつないでいくような新しいネットワーク、横へのいろんなつなげ方がもっとほしいなあと僕は思います。

東京に来て思うんですけど、東京って専門性が非常に問われるんですよ。専門のある人たちにお金が行くんですね。関西におった僕らとしたり、ひとつの専門性にお金が行くわけではないので、いろんな横のことをやれないと生きていけないんですね。しかも、横のつながりの中でいろんなコミュニケーション能力が磨かれていって……。僕は今東京に住んでいますが、お金の流れる専門性と横のネットワークのバランスがうまくとれるようになるといいと思います。

竹久：専門性という縦軸があるとすれば、それだけでなく、地域って
いうひとつの枠にもこだわらず、横で水平につながっていくみたいなこ
とですかね。

参加者A：私のまわりでは関西でもお金がまわっている方はいらっ
しゃるので、関西やから東京やからってことではないんじゃないか
なって思います。あと、個人の価値感も考え方も違うので、1個ずつが
バラバラになって、パーソナルなところでシャッフルしてつながるとい
う方が面白いなと。関西とか関東とか団子になっているのを細分化する
みたいな、離れた上でもう1回つながれるところとつながるみたいな
のできるというなと思いました。

森山：ある学校で、生徒が学校のカウンセラーに相談に行かなくて、
カウンセリング魂を持つほかの大人のところに行くという話がありま
した。役職に関わらず、いろんな人たちがいろんな役割を、その場や
相手に応じて担えるとよいのかなと。あるときはご飯をつくったり、ある
ときは心理的なサポートをしたりとか。横のつながりってという話で思い
出しました。

参加者B：今日の話で印象的だったのは、個性とかそういうものが概
念としては共有されているものの、身体的に感じられているかとい
うと、まだまだできてないという砂連尾さんの話です。確かに今、居場
所や、居場所にまつわる問題を政策立案に生かしていこうっていうの
はすでにやり始められているし、広がりやすい。けれども一方でそれ
がどれだけ体におちているのか。例えばLGBTって頭で理解できるけ
ど、どれだけ自分の体におちているんだろうかということをすごく意識
させられました。

前半のお話の中で、居場所のその発展型から社会を揺さぶるって
いう話があったと思います。頭でというより、身体までおりてきたときに、
今の社会の枠が全然自分の体や人の体と合っていないことに気づく。
それによって、ことの深刻性がわかって、やんなきゃねと何か動かして
いく、社会を揺さぶるというものなんじゃないかなと感じました。だから、
頭でつくっていく居場所だと、イベントをやるにしても何百人を集

めなくちゃとか、何千人にリーチしなくちゃみたいなのをすぐに思い
たってしまうんだけど、「身体的に感じる」という意味では、実は本当
に数人でもいいし、自分の家族でもいいわけで、何かそういうところが
改めてそれこそ「いま、必要な場所」かなと今日すごく感じました。

竹久: キーワードとして「身体」というのが出てきたので、それに付け加
えたいなと思うのですが、最近SNSの普及で、身体がない空間でも
コミュニケーションができることがふつうになっている中で、こういう
人と人が出会う、身体同士がともにある場で対話するというこの意
味に改めて着目したいと思っています。身体がそこにあるかないか
で、コミュニケーションに違いが生まれていると思います。

参加者C: 障害とか、精神障害の人を受け入れてくれる場がほしいなと
思っているんですけど、みんなが「受け入れますよ」ってなっているよう
な変な空気感じゃなくて、中にはちょっとびっくりしちゃう人もいるん
だけど、場としてはちゃんと受け入れているみたいな、そういう場があ
るとうれしいなと思います。

参加者D: 「いま、必要な場所」は、今の発言とも共通するところあるん
ですが、例えばお腹が空いたらお金を払えばレストランに行っでご飯
を食べたり、風邪をひいたら病院に行くっていうのがあると思うんです
けど、そこに収まらない部分での拠りどころっていうか、行き先が、今、
必要になっているのかなと感じています。病院ではないんだけど、
自分の気持ちにあわせて行ける場所がわかる地域の地図というか、
そういうものが新しく生み出されてきたら便利かなと思ったりして、「い
ま、必要な場所」として感じています。

竹久: 機能として分けにくいけれども、人が人と会える、それこそ小山
田さんの言う共有空間のイメージでしょうか。

参加者D: そうですね。あと、できれば私はお金を持ってないので、お
金がかからなくても済むところがあると、なおいいかなって思います。

「制度」としての居場所にはないもの

横須賀: 居場所っていろんなところで大事って言われて、「居場所ほしいね」っていう話はいっぱいあるんだけど、「さあ、どうぞいらっしゃい、居場所ですよ」って言っても、それは居場所なのかっていう疑問が私の中にすごくあります。場として開くとか、制度としてシステムとして居場所っていうものを持つとかっていうことって、頑張ればできちゃうことなんだけど、今、求めているのってそうじゃないんじゃないかなって。さっき砂連尾さんが言っていた身体ですが、私はずっと人権教育をやってきて、一番すごく難しいのはその「身体化」だとずっと思っています。どうしたら「私はここにいていいんだ」って思えるのかなって考えてきて、今のところ私が行きついているのが、暮らしとか、誰でもが関わろうと思えば関われるレベルのもので、それで「310食堂」をやっているところもあるんですけど、誰もが、「私」としてそこにいて場が成立するような、私はここにいて、私はここで何かができる、私がここで何かを発信したら、何かが変わって……という、そういう経験によってしか身体化していくことって難しいんじゃないかなと思っています。何かいろんなことにリアルに呼応できるような小さいことがすごく必要な気がしています。

小山田: 今のつづきみたいなもんなんやけど、子どもの頃の記憶をたどると、最初にレコードを聴いたのは、隣の知らないお兄ちゃんの部屋でした。下宿していたお兄ちゃんをちょっと覗きに行ったら、持っていたCDを「聴く？」って言われて、入って行って聴いたりとか。中学校のときに、美術の先生と2人だけの美術部っていうのをつくったんですよ。すごいえこひいきですよ。でも何か秘密めいた関係というのは、ものすごく刻まれているんですよ。コーヒーの匂いと、なんか古いカビ臭い木造校舎の匂いと、先生が持っている美術の本とか、そういうものにちょっと憧れとともに背伸びをしたくなる感じとか。でも、今の子どもたちって知らないお兄ちゃんの部屋に行くとか、もう犯罪のにおいがしますよね(笑)。そういう機会が奪われている。でも、興味はありますよね。

ちょっと背伸びをしたいときに、公共が提供するものの中にそれはな

いんじゃないかと思うんよ。個人的な関係というのを、安全やけどちょっとスリリングに体験できる機会を、社会を整理し尽くして失くしてしまったんじゃないかと思うんよね。それで、公共がその代わりをしなきゃいけないとか言うねんけど、公平原則っていうのがあって、えこひいきができないとかさ、なんか事故があつたら責任のとりようがないとかで実現できない。社会の中にもう一度何か個的な関係というのが豊かに広がればいいのと思う。もう人材はいる。マニアックな人もいるし、いろんなことを考えている人もいるし、困ったちゃんもいるし、いろいろなんよ。そういう人にどうやって出会うかっていう、その関係性をつくるっていうのが「いま、必要な場所」って言われてるもんじゃないかなと思って。小さなことが何かにつながっていく。ええのと出会うと、一番リアリティのある身体に刻まれるよ。そういうのをどうやったらみんなでき体現できるか。例えば、3歳の子どもと出会った瞬間に何を残すかとかいうのを常にそれぞれが考えていたら、細かいつながりとか身体性とかができたら、人知れずえらいことが起こるんちゃうかなと、そういう秘密めいた感じがほしいよな。

参加者E: 個人個人が専門性とか、好きなものがいろいろあって、そこからつながっていくものもあると思うし、また逆に、全然趣味の合わない人でも知り合ったらもしかしたら考えや視野が広がるかもしれないと思うので、そういう場ができたなら、もっと豊かになるかなと思いました。

久保田: 私は、引きこもることとか、孤立することが、必ずしも悪いことだと思ってないんですよ。もともと美術系の人たちというか、ま、大学もそうですけど、引きこもりの集団みたいなものじゃないですか(笑)。そういうなんていうのかな、ブラックな、要するに「健全じゃない」みたいな部分も含めて、そういう人たちっているし、そういう時期ってあるし。だからそれを「あんまりいいことじゃないよね、開こうよ」って言われるとちょっと違う気がします。

これだけインターネットが発達したから、家に引きこもることができる人もいるわけですよ。それが悪いとかではなく、それが「現代」だと思うんですよ。だから、引きこもるっていうことをもうちょっと発展させていくとどうなるのかなと。そこから何かができるようになるには、

やっぱり美術館ってというか、こういうアートの現場がもっとそこを掘り下げていくべきなんじゃないかなあと思うんですよね。オタク文化が生まれたのだから、最初あれだけ批判されたのが今は世界で見られているわけで、アートってそういうなんかすごいマイナーなものをちゃんと引き取って、メジャーにするわけではなくて、マイナーのものはマイナーなものでいいじゃないって、これはこれで素敵だよって言うのがアートだと思うから、公共だとやりにくいかもしれないけど、私は美術館が思いっきりそこに切り込んで、新しい、見たことないものをつくってほしいなあって思います。

森山：公共を上手に使えばいいと思っています。今日、昔の上司がこの場にいらしているのですが、以前、その上司と一緒に野村誠さんと仕事をしたときに小学校にみんなで合奏の練習に行ったんですね。その中にスカートをはいている男の人とかいろんな人が混じっていて、後で校長先生に呼び出しをくらったんです。「どうしてそんな人を連れてくるんだ、水戸芸術館だから信用していたのに」と。でも、それをひっくり返せば、「水戸芸術館」のプログラムを通して、子どもたちがふだん会えない人たちと会えたのがすごい良かったなと思っています。水戸でいうとキワマリ荘とか、面白いスペースがありますが、そういうところに直接は行きづらくても、まず入り口として公共を使ってつなげられれば。さきほど「アート」ということで焚き火の許可がおりたという話が小山田さんからありましたが、そういうふううまく利用していければいいんじゃないかなと思っています。

参加者F：スカートをはいていたという話は、ただ男の人がスカートをはいていただけのことで、それはわざとやったわけじゃないですよ。だから、ルールを無視したわけではなくて、男がスカートをはいてはいけないというルールがあると思わなかっただけです。だから忖度しようがなくて。別にスカートをはいたからってどうってことはない当たり前のように思い込んでいたから、まさかこんな反発がくるとは！とあとから気がつく。だから、ルールであるということを知らずにいたんですね。たぶん、アートの関係者だからなのか(笑)。もしかしたら、それはひとつの方法かもしれません。

ただ、かつては僕30歳ぐらいからここにいて仕事していたんですけど、その倍ぐらいの年齢になってくるとですね、もうルールを知り尽くしてしまうとやっぱり焚き火ができる場所がほしいよなあっていうふうに思うんです。一方で、さきほど小山田さんは、公共が提供するものの中には(必要な場所は)なかなかないとおっしゃった。もう一方で、久保田さんからは、アートセンターや美術館には突拍子もないものを期待するという言葉があり、僕も期待したいところなんです。しかし、さらにもう一方で、先ほど横須賀さんが、「場」というのは制度とかシステムじゃないんじゃないかっておっしゃったでしょ。確かに制度として生むことが、じゃあ補助金出すよっていうだけで何かできるのかというと、なかなか難しい気がするんです。

今日、前半の話の中で、横須賀さんの言葉に非常に印象に残ったことがあって、「誰かが誰かに何かをしてあげる場所ではない」というようなことをおっしゃられた。だとしても、どういう場であるという、何かその場の特徴や個性、または理念や目的はきつとあるわけで、一体それをどうやって自然に共有して、例えば役割分担もしないで現場が動いていくのか、そういう文化はどうやったら出てくるんだろうか。あるいは一度文化ができ上がっても、壊れてしまったり、形を変えたり、勘違いでずれていったりということもあると思うんですけど、良い方向に向かっていくために何か意識していたり、自覚的でないといけないところもあるんじゃないかと思うのですが、その辺に関してコメントいただければ。

横須賀: たぶんボランティアをしたいですっていう方には2通りの動機があって、ひとつは、困っている人に何かやってあげたいっていう動機。そういう人が圧倒的に多い。もうひとつは、私でも何かできることがあるかもしれないって思ってくる。私は、後者がすごく大事だなんて思っています。自分には何もできることがないけれども、ご飯をつくることや洗い物だったら私にもできるかもしれないって思ってくる。そういう私にもできることがあるかもしれないっていう思いにフォーカスしたアプローチをするっていうことを、私はそこだけは意識的にしているかもしれない。だから、何かやってあげようって思ってくる人でも、あなただったらこれができるわねって、あなたにはこれをお願いしたいわっ

て言うかもしれない。で、何かやっているうちに、ボランティアさんも顔見知りになってそこにつながりができると、今までは誰かの場所を誰かのためについていう動機でやってきた人たちが、いつのまにか「私」の場所になっている。その瞬間に、その場所は誰かに何かをしてあげる場所ではなくって、私の居場所になる。そんな気がするんです。

310食堂はとくに出入りが自由なので、どんな人が来るかわからない。いろんな人が来れば場は変化していく。私はその変化していくことがすごく価値のあることだと思っています。その都度集まって、さまざまな背景を持っている人たちが、その場で何かしらの合意をつくっていくっていうことが大事だなんて思っているんです。理念のためにビデオを撮ったりするって、あれは動画がほしかったわけじゃないんですね。インタビューすることで、自分たちがどうしてここに集まっていて、ここで何を待たのかっていうことを確認する作業を個人個人にしてほしかっただけで。動画ができてそれを見たら、あ、私たちの場ってこんな感じだったよねっていう確認ができて2度おいしいって状況になった話で、それ以外のコントロールは何もしていません。

美術館／アートセンター／公共

竹久:「いま、必要な場所」というところから話し始めて、半分ぐらいの方々のお話を聞いたところで、次の段階に移っていきたいと思います。「いま、必要な場所」を考えるつづきとして、ここがアートセンターであるということをもう一度思い出していただきまして、アートセンターとして、展覧会を開催するという自明の役割はありますよね。そういったことは当然あるとした上で、それ以外にも何か「いま、必要な場所」という意味で、アートセンターに求められること、もの、役割があるかどうか、そこに話を展開させていけないかなと思っています。

先ほどから出ているように、「公共」ということがこの施設の大きな性質としてあげられますが、それによって難しさもあるというお話がありました。同時に、公共だからできることもある、糸口になれる、信用してもらえ、安心してもらえる場所として実際に機能していると思うんですね。何かその辺りからアートセンターというところに引きつけてこの

話を展開させていければと思うんですが、どなたかコメントいただけないでしょうか。

参加者G:先ほど砂連尾さんが東京と地方の違いってことをおっしゃって、私もそれをわりとよく感じるんですけど、東京では何かができるっていうことがすごく大切にされていると思うんですね。何かができるっていうことが大切にされている東京ってちょっと息苦しいなってふだん思っているんですけど……。それと、さっき横須賀さんが誰かが誰かのために何かをしてあげなければいけない、そういう場所になってはいけないっておっしゃって、でも、自分がそこで何かをできるかもしれないっていう気持ちも大切って言っていたと思うんですけど……。そこで何かをちゃんとやらなきゃいけないって思ってしまうっていうことには、人からの評価を求めるとか、褒めるっていう他の人からの行為が必ずそこに入ってくるんじゃないかと思うんですね。

それで、美術館という場所なんですけど、そんなことについて考えると、美術館って評価をする場所なんじゃないかって思うんですね。

やっぱり褒められると嬉しいので、それに向かって頑張ってしまうっていうことがあると思うんですね。評価されることがその人の存在意義みたいに東京ではなっていることがすごく多いってふだん感じているんですけど、そうすると評価を求めて頑張ってしまう。それで、やりたいことをやることと、褒められるためにやることの境目がなくなってしまっているのかな。それを自覚してもらっているのか、その問題を、美術館で何かやる時にはすごく慎重に扱った方がいいんじゃないかなってちょっと思っています。

うまく話せている自信がないんですけど、私みたいにうまく話せない状況っていうのを、取り上げてもらえるって言ったらわかりやすいかもしれないですね。

竹久:確かに美術館には評価をするっていうことがひとつあると思うんですけど、評価の基準をどこに置くのかっていうところだと思うんです。その基準をどこに置くかで、まったく変わってくると思うんですよ。評価されるから求められること、褒められることをやってしまって、やりたいことができなくなるっていうのは、一概にはそうでもないかも

しれないなど。どこに基準を置くかっていうことなのかなと思いました。

参加者G:表現する場所に来ることによって、人に認められたいって
いう気持ちが増幅されるっていうのはあるんじゃないかなと思います。

久保田:それは、長い間、美術の教育が間違えたことだと思うんです
よね。要するに、評価されたものがいいってということが定着してしまっ
た。だけど、そもそもアートとか芸術とかはそこをぶち壊す力もあつた
はずなんですけど、そこがそぎ落とされてる感じがするんですよ。

あともうひとつは、私は在野なんですよ。要するに、福祉って国の事
業なので、福祉においては国のお金、税金で運営しているっていうところ
があるけども、あれは障害のある人たちがとにかく健やかに過ごす
ことをケアするっていうことでお金をもらってると思ってるんです。
だけど、美術館とか公共施設に勤めている人たちが、なんで税金から
給料をもらってるかっていうところを、もっとちゃんと突き詰めて考え
ていけばいいんだと思うんですよ。要するに税金なんですよ。

公民館とか、浜松では協働センターっていうんだけど、そういうところ
の機能と、今日やっていることがオーバーラップしていくんです、私の中
で。じゃあなんで公民館でこれができなくなっちゃったのかということ
ですよ。公民館って地域にあれだけたくさんあるし、公民館でこう
いう場が開けたらどんなにいろんな人の居場所になるか。公民館その
ものが今そういう機能を失ってしまって、さっき誰か言っていたけど、
もう公共が公共じゃなくなったっていうね。でも、公共じゃなくなっ
たって私が言うのはいいけど、公共施設を運営している人がそれを
言っちゃまずいなって思っていて、要するにちゃんとしてよ、って思う。
ちゃんと仕事しないとイケないと思うんです。公民館でできなくなった
から、アートセンターで引き受けるしかなくなったっていう感じがすご
くする。だから、アートセンターで引き受けることにしたんだったらちゃ
んとやらないと、この国滅んじゃうかもしれないですよ。コミュニティ
が本当に崩壊しちゃうかもしれない。

それで、私たちみたいな在野は在野でがんばるんですよ。私たちは
NPOだから誰が何と言おうと、これは違うと思ったらやっていくしか
ないなと思ってやっているんです。行政にいる人たちがそれができな

いわけじゃない。だって私、NPOの大きくなったのが行政だと思っているから、市民が幸せになることを考えて仕事をしてるはずなんだから、その原点に戻れば、おのずとやらなきゃいけないことが出てくるし、それを、さっき小山田さんがおっしゃったように、焚き火みたいにこれ「アートプロジェクトなんですよ」っていうと許されるんですよ。そこを本当に上手に使いながら、社会を変えていくっていうことにみんながもっと注力していかないといけないんじゃないかなって。

参加者H: 今、水戸市には公民館はないですからね、市民センターです。水戸市の市民センターは小学校の単位に全部あって、絵画展でも何でも自由にやっていますからね。なので、今、言われたのはちょっと違う。やりたい人がやれないということはまずないですね。

久保田: 私、障害者施設をやる前に、公民館、浜松でいう協働センターを借りようとするときに貸してくれないんですよ。なんでかという、まずきれいに使えない。それからいろいろなルールがあってそれにそぐわないという、そのルールを守れないってことでだんだん排除されるんですよ。公民館なのになんで?って。

参加者H: 浜松とか静岡とか神奈川は考え方がちょっと違うんだけど、施設は向こうのほうがすごいんだけど、機能としては水戸市のほうが上だと思いますよ。

竹久: 地域の各論は置いておくとして、もう少し違う観点から……。

参加者B: 焚き火がアートプロジェクトだったら許されるわけだから、それを活用してっていうのはそのとおりだと思うんですが、危惧するのは、そのアートプロジェクトだからっていうことさえ通用しなくなるというときがそのうち来るんじゃないかということです。アートだからしょうがないよねっていうある種の免罪符がだんだん通用しなくなっていったら、それこそどこに求めたらいいんだろうって。だとすると、美術館は「アートだから」っていうことをもちろん堂々とやると同時に、その「しょうがないよね」っていう状態がつづくような活動をしていかなくちゃい

けないんだろうと思います。そういう意味では、さっき小山田さんが言った「整理しきった」っていうのが今の社会だとしたら、実は整理できてない、というか、「そもそも整理する必要があるかどうかわからない領域」っていうのがあって、それを常に見せていく。そういう領域に出会える場がアートセンターには必要だと思います。

先ほどの評価の問題について、美術館って、どういう視点かとはともかくやっぱりお墨つきをされていて。つまり、「整理されていないけどもなんとなく必要そうだよな」っていうものをそうだと言ってくれる人がいるから共有できる、でも一方で、共有できないところもあるっていうふうにすることで、ちょっとずつ進むのかなあと思う。(美術館の)俯瞰的に評価したり、見せていくっていう機能は、社会でみんなで何かを共有したり、理解したり、先に進むためにはすごく重要な機能かなと思います。

砂連尾: NPOが大きくなったものがひとつの行政だというのは、本当にその通りだと思う。だけど、僕も小山田さんも大学にいて、大学ってひとつの自治だって思っていたものが自治でない。前衛がテーゼと言いながらめっちゃくちゃ保守的じゃないですか。なので、NPO(が大きくなったものが行政であるという正論)を前提としないでどうしていったらよいのかという問いが、アートセンターとして考えていくときのひとつの知恵だと思うのですが……、ここで、そういう施設で働いている、この場にいる友人にちょっと意見を聞いてみたい。(NPOが大きくなったものがひとつの行政だという)正論が通じない社会になっていってる中で、正論を押し進められるだけのパワーがある人はまだいい。だけどそうじゃない人は、どんどんそうじゃないものに流されていってしまう、そのことにどう抗えるか。その知恵をなんとか一緒に出し合いたくて意見を聞いてみたい。

参加者I: 行政がそうあるべきであるっていうのはもちろん間違いなくそうで。ただ現実はそのじゃなくて、企業も、企業市民というぐらい社会貢献という枠を持っているわけだけれども、現実はその機能してなくて、寄付もなくて。例えば市民センター的なものは予算もなくて、今のような議論も現場になくて、実際本当に不毛なぐらい難しい。

実は、この「アートセンターをひらく」がオープンして状況を見たときに

言ったんですけど、ある意味、ユートピアのような状態がここで起こって、この議論も大変有意義だなんて実際に思うんですけども、これ、なくなるんですよね。なくなったときに、私たちが見た夢をどう責任とってくれるの？っていう感覚もどこかにあるような気がして。でも、それはこちらにフィードバックされていくと個人的に考えています。つまり、我々はどうするのか？って、(この企画によって)突き返されているんだろうなと思いました。

ただ、実際にどうやっていくかという手だて、得策というか処方箋はなくて、ゲリラがつづくんだと思います。先日、アート系のNPOが集まるフォーラムを青森で開催しました。そのときに政治学者に登壇してもらったんですけど、民主主義とは何かみたいな話をしてもらった中、「ネットワークである」と。「人と人がつながっていく技術自体が民主主義なのだ」と、トクヴィルという古いフランスの政治学者の言葉を引用して断言されていましたが、そうだなと思う。僕自身は今、水戸に暮らして5年いすけれども、子育て中なので、スーパーと保育園と公園しか行かない状態で、仕事は水戸でしていないので、知り合いがなかなかできない中、この美術館で工作やお茶を飲んだりしていると、いろんな方と接点を持っていく。こういうのがめっちゃめっちゃ貴重やなと思います。この何も目的がないような感じで出会えて、ちょっと話をして、また離れていってということだけで十分に豊かだなと思うんですけど、これを維持するのがまた難しいというか。

市民センターはね、楽しくないんですよ。なぜか。全然行こうと思わない。なぜかという、マーキングができない。僕も公立の文化施設に勤めていて、もうすぐ開館20年になりますけども、市民活動を受け入れているけれども、マーキングしてはいけないので、20年間の市民活動の歴史は建物には一切蓄積されないという、それが公共施設の本当にだめなところ。ライブハウスとかクラブとかはマーキングできるんですよ。そうしたら、その街の文化として蓄積されていく。それが行政施設ではできない。美術館もマーキングする場所ではない。アートセンターでマーキングできればいいんだけど、それはできないかもしれない。そのマーキングをどうやっていくかというのは、僕ら町場の人間の問題だと思います。

小さな活動をもぞもぞと持続させる

小山田: なんかもう、いろんなところが機能不全であることはなんとなくわかっていて、だから今、作戦会議をしているっていう感じなんやろうね。「アートセンターとして」とかということ大きな言語で語り始めると、その大きな概念を、アートセンターとか美術館がしなきゃいけないっていう責任が先に来るとね、大きな言語で喋っても、嘘ですよ。なので、ほら、俺も焚き火で全部を語るんやけど(笑)。でかい焚き火ってあるじゃないですか。キャンプファイアーもそうだけど、ああいうのって、陶酔感があるんですよ。何かみんな同じ夢を見ている感じ。それってひとつの効果もあるし、すごく面白い、何かを進めるときには必要なときもあるんだけど、同じ手法で、ファシズムがそういうものを利用したりとかもしました。僕らもそういう危険性をなんとなく感じるんよね。陶酔感のあるものに、あるひとつのイデオロギー、イデーに出会ってしまって、それに惹かれていく。それで、群衆として進んでいく感じ。何かそういうものを、アートとか美術館とかそういうものは、担ったらだめなんじゃないかと。社会の旗振りを常に求められるけど、いやいや〜とか言いながら。

焚き火でいうと、私はでかい火は嫌いで、小さい火をたくさんというのが好きなんです。小さい火がたくさんあると、ひとつずつの焚き火は違うんですよ。焚き火に集まった人で話していることも違うし、焚き火の仕方も違う。でも、なんとなく寄りやすい人数が、まあ焚き火の場合やったら、6、7人がひとつの焚き火を囲って、それが10個あれば70人いけるんですよ。100個あったら700人。そんな感じでそれぞれに焚き火マスターというのがその都度できたりするし、会話がそこで主流の会話というのが行われたりするんだけど、疲れたら隣に移ればいいんですよ。焚き火ははしごできる。

なんか「そういうのが集まりあった状態っていうのをアートセンターっていいです!」と言い切ったほうが、でかい言語で語らなくて済むんじゃないかなと。で、その手法は、いろんな逃げにも使えるし、弱さを露呈しちゃうこともあんねんけど、何かこう、もぞもぞと持続的につけていく方法のひとつとしては、いろんなものに適用できるんじゃないかと。食堂とかも、「すべての人を救うために」とかというような命題を掲

げると、絶対に嘘があるじゃないですか。いろんな種類がたくさんあることで、なんとなく公平原則はつくれたなっていう気分が漂うとか。そういう手法としてやっていく。大学もそうです。ひとつの理念で教育を決めたらえらいことですよ。よく大学のスローガンとか、ポリシーとか、なんかややこしいことを文科省が求めてくるんですけど、そういうものでは縛られないので、大卒では多少嘘をつきながら、中で細かく割って、多様な状態をつくり出すというのをなんとかしている。この芸術館で「ブカツ」っていうのがちょっとずつ増えてきたりするように、そういう多様なものをどうにかまとめていく器として、美術館とかアートセンターがどう機能していくかっていうところに、必死にアイデアを出す必要があるのかなと。

いろんな公共機関の、今の話とかも、いろんな公共機関が努力はしてるんだけど、行政の答弁というか、説明のときに大きな言葉で喋らなきゃいけない要求が来るんですよ。で、何をするの？とか、何をしたの？とか。そういうときに上手にごまかせる方法を編み出して、なんかもぞもぞ多様なことができるっていう。そういう保証制度みたいなものを美術館が担えるようになればいいなというのが、感想かな。

森山:「アートセンターをひらく」にあわせてブカツをひとつ立ち上げた中崎さん、今のお話どうですか？

中崎透:僕は、少し前に出た、アートセンターとして必要な場所の話が、だんだん公民館の役割を担うみたいな話になっていったときに、本当にそんなことが水戸芸術館で、ふだん展示会もやっていてスペースも埋まっているし、そんな覚悟あるんだろうかって感じた違和感が、さっきの小山田さんの話ですごく腑に落ちて、あ、なるほどって納得できて面白かったです。

「役割」の話が出ていたと思うんですけど、僕は誰にでも何か少しでも「関わりしろ」があるとか、役割があることをとても良いと思いつつ、でも半分疑っていても。それは以前、「高校生ウィーク」についてのインタビューをされたときにも話したんですけど、「高校生ウィーク」ってめちゃくちゃよくできていて、高校生はカフェのスタッフであって、そこに来る大人は、美術館のスタッフで彼らをケアする人であったり、ボラン

タリーでサポートする人だったり、お客さんであったり、みんなにうまく役割が配置されていて、ある種、その中で演じればそこでコミュニケーションが成立する形式みたいなのができてるんですよね。だけど、本来そういった場所がある必要性って、例えば高校生だったとしたら、先生とか、バイト先の店長とか、両親とかではない、「ふだんの役割のカテゴリーにない何か」に自分がどういう態度でどう出会って、どうコミュニケーションをとっていかってという場所であることが大事だったりして。その行ったり来たりみたいなところが、僕自身もいろんなプロジェクトで探っているところがあります。

児童館に以前プロジェクトで関わったとき、児童館という場所って、スタッフとか先生的な役割以外の人の場所がないんですよね。「この人誰？」みたいな目で見られて。しかも、呼ばれて行ったときも、「この人、先生で何々をします」とかの紹介は特になくて、「いてください」って言われたときに、なんかもう所在なく図書室みたいなところで置いてある『ワンピース』をずっと読んでゴロゴロしてるみたいな。でも、そこがすごくいいっていうか、徐々にその「誰だ、こいつ」っていうのをお互い探り合いながら、ちょっとずつ関係ができていくプロセスが、僕は面白かったけど、たぶん彼らにとっても面白くて。久保田さんのレッツに行ってプロジェクトに関わったときも、けっこうその感じに近くて、役割が与えられないで放置されて、ずっと本を読んだりとか。役割を持たないままいいっていうのが体に馴染んでくるとすごくいい。

その探り方っていうか按配みたいなものは、僕は「高校生ウィーク」をやっていくときに、きっちり役割があるからいいってわけでもないし、放置だからいいってわけでもない、その按配をどうつくっていくんだろうって、気にして見えています。

森山: 高校生のギャラリー入場料が去年無償化されて、無料招待期間としての「高校生ウィーク」の役割は終わったと思うんですね。それで、夏ごろに、今後「高校生ウィーク」どうやっていこうかみたいな相談会を、中崎さん含め、別な方が開いてくれたんですけど、この「アートセンターをひらく」を経て、これからどういうふうに美術館の中の場をつくっていくかっていうのを考える時期に入ってきたのかなと思っています。

居場所から身体へ

参加者B: さっき出た、与えられない役割の中で、あるいはそこで擬似的にある種のルールの中で自分の役割を見つけていく、それは他者との関係とか、あるいは自分自身で自分の新しい身体に出会っていくとか、見つけていくような感じがして、最初の話にもつながるなと思って聞いていました。

一方で、砂連尾さんは、身体そのものにフォーカスすることをやっているじゃないですか。他の居場所は、食べるとか、その場にいるとかで、直接的に身体とはいわれていないけれど、身体を見つけていくプロセスがあって、自分の居場所を見つけていく。でも、砂連尾さんは最初から身体にフォーカスしている。自分で見つけていくとか、その場で与えられたことをやっていく身体性にはすごくリアリティがあると思うんですが、最初から身体をむしろ対象化してやっていくっていうことは、それとどう関係があるのかなのか、非常に気になるんですが、教えてもらえますか。

砂連尾: そうね。なんていうか、概念とかいうと本当にそこにすぐ体がついていかれてしまう感じがあるんですね。そこに向けてがんばってしまうと、そこに疲れてしまう体が出てきて……。例えば、「変身ワークショップ」に来ていただくと、例えば、今から「本」になろうとか、そんなん嘘でもいいんですよ。嘘でもいいんですけど、そういうエリアをものすごくミニマムに獲得していった先に……。なんか自分には多動的な自分と、ものすごい膝を抱えている自分が両方いて、すごく膝を抱えている自分を解放していくためには、そういうふうの世界を自分で再構築せざるを得なかったっていうところで……って余計に抽象的な答えになっているよね(笑)。

参加者A: 砂連尾さん、昨日、シャワーヘッドが話しかけてくるっておっしゃっていて(笑)。なんかイメージとか妄想とか、体とともにいろんなことをきちっと結びつけられる感覚が日常にあるんですね。私は小山田と時間をともに過ごすことが多いんですけど、小山田はもうひとつおかしくて(笑)、ドライブしていても、「あの山、最近できたん

だよねえ」って。「最近っていつですか？」ってきくと、「何万年前だよねえ」って。全然最近じゃないやん！みたいな話になる。常々イメージしながら生きてはるんですよ。常々見えてない世界をたぶん生きてらっしゃっていて。でも、シャワーヘッドのこととか、山のこととか、他の人のことを考えてみたりする中で、いつも自分とは違うところに心を開こうとしているというか、体も開こうとしてはるような感じがして。他の人たちがどういうふうに思わはんのやろうとかいうのを想像する、イメージするっていうのはなんか楽しいし、知らないイメージの仕方を聞くっていうのも大事なんだろうと思っていて、それを訓練すると、公民館だろうがアートセンターだろうが、家でも外でもどこでも、もうちょっと楽に、みんなと一緒にいい感じでいけたらいいんじゃないかなと思いました。

砂連尾: もしかすると、そういう時間軸の違うイメージを確保してくれる場所というものとしては、今そういう場所が少ないので、この会期が終わるとこういう話ができなくなるかもしれないけれど、それを何かアートセンターとして評価する軸の場所と、評価しなくて変化もしなくていい、そういう場所みたいな「妄想スペース」みたいなものに、僕は賭けてるんです。そういう妄想する人がいれば絶対伝播すると思ってらるんですよ。会期は終わる、でもここを経験した人間が1人増えるだけで可能性が何かつながるっていう発想をどう持てるかっていうことかなと思います。だって、こんな短い期間でシステムは変わらないし、法律も変わらない。じゃあどうするかってときに僕自身はその人間の体を信じるっていうやり方でしかできないってことなので、それはいろんなやり方があって全然いいと思っています。

竹久: 「アートセンターをひらく」を開く前から第Ⅰ期でこういう開き方がいったん終わることは明らかだったわけですけど、では第Ⅱ期にどうつなげるかっていうときに、第Ⅱ期はこういう形でのアートセンターの開き方ではないと言うと、「え、もう閉じるんですか」とか「やっぱりずっとは開きつづけられないですよ」って話になる。いや、そうではなくて。こちらとしては、あえて開くことでそこで経験を得る、人と会う、そこからつながることを目指したわけです。例えば、今回こうして、横須

賀さんの310食堂の話詳しく知ることができ、そしてアートセンターだったり美術館だったりですべてを負うことはできないということも確認できた。では、その上でこの第I期で見たことが、在野の方々がなさっていることへとどういうふうにつなげていけるか、連携できるかっていうところに発想が及ぶようになる。そこに可能性があると思います。

あと10分ぐらいでこの場をまとめていければなと思うんですけども、キーワードをもう1回見ていければなと思います。読み上げていく感じですけども、「居場所から社会を揺さぶる」というお話が出たり、「引きこもることは必ずしも悪いことではない」という意見や、「居場所を用意してどうぞと開くことで人が来るのか」という疑問があがりました。それに対して、「誰かが誰かのためにしてあげる場ではない、私でも何かできるかもしれないというところから、自身の居場所になっていく」というようなお話がありました。

そして、「美術館には評価がつきもの」ですが、では「評価の基準をどう考えるか」、でも本当は「アートは評価さえも覆すというかぶち壊すような力もあるんじゃないか」というお話もありました。

「『アートセンターをひらく』でやっているようなことが、ある意味公民館が担っていた役割とも言える」という話もありましたね。「整理しきれないものをそのまま見せて、整理しきれないものの大切さを伝えていく」というお話もありました。そして、「『公共』には良さと難しさ」があり、大きな言語で語るよりも「小さなことをつないでいく」べきではというお話もありました。「もぞもぞと小さな動き、小さくて多様なあり方を保証する制度としてアートセンターとか美術館というのは考えられるんじゃないか」という提案もありました。

哲学カフェというのは答えを見いだしていくものではないので、「『いま、必要な場所』」とはこうでしたね」というふう一言でまとめることを目指してはいないんですけども、こうやってみなさんのお話や意見を聞きながら、それぞれに考えを深めていき、この場を企画した私自身も次につなげていく糧にしていきたいと思っています。今日はたじろぎ、もぞもぞしながらも(笑)、宿題として考えるべきことをたくさん得ました。最後にあと5分ぐらいですが、つけ加えておきたいことがありましたらお聞きしたいと思います。

関係性や役割が切り替え可能な領域

参加者J: みなさんのお話を聞いて、私は取手でアートプロジェクトをやっているんですけども、実はアートセンターを目指していて、でもそのアートセンターが一体どういう場なのかについてもやや悩んでいたのが今日ここに来ました。

気づいたことは、「そもそも関係が定まらない場所であること」をスタートのルールにするだけで、公共の立場にある我々とか、たとえば水戸芸術館さんとかがやるのが、徐々にスタンダードになるのかなっていうところに光を感じました。

なんていうか、自分の関係は自分で決めるみたいなことが、そこにつながるあまねく人に許されているみたいなことが、「提供」するんじゃなくて、お互いに、そうやって確かめ合いながらできるみたいなところが、目指すところなんかかなと思って聞いていました。

参加者K: 私は、全然アートの専門家ではないんですけども、まったくの素人として思うところを2点ほど。1点は、公共という言葉がみなさんからいろいろと出てきたと思うんですが、もともと公共／パブリックというのは、プライベートの集まり、プライベートなものをみんなが持ち込める場であるはずであって、本来あるパブリックっていうものを、アートセンターこそ私は目指すべきかなと。我々は「公共」って言ったときに、行政の縛りがあり、もうひとつは、プライベートも、ある意味では偏見や固定観念で役割を固定化し、外側から定義づけてしまうってことがあるんですが、そういうものをつぶらう場所であるべきだ。本来「公共」っていうのはそういうものが、もう一度ぎくしゃくしながらもいろんな関係をつくっていく場であるはずなんですが、現実にはなかなかそうはならない。

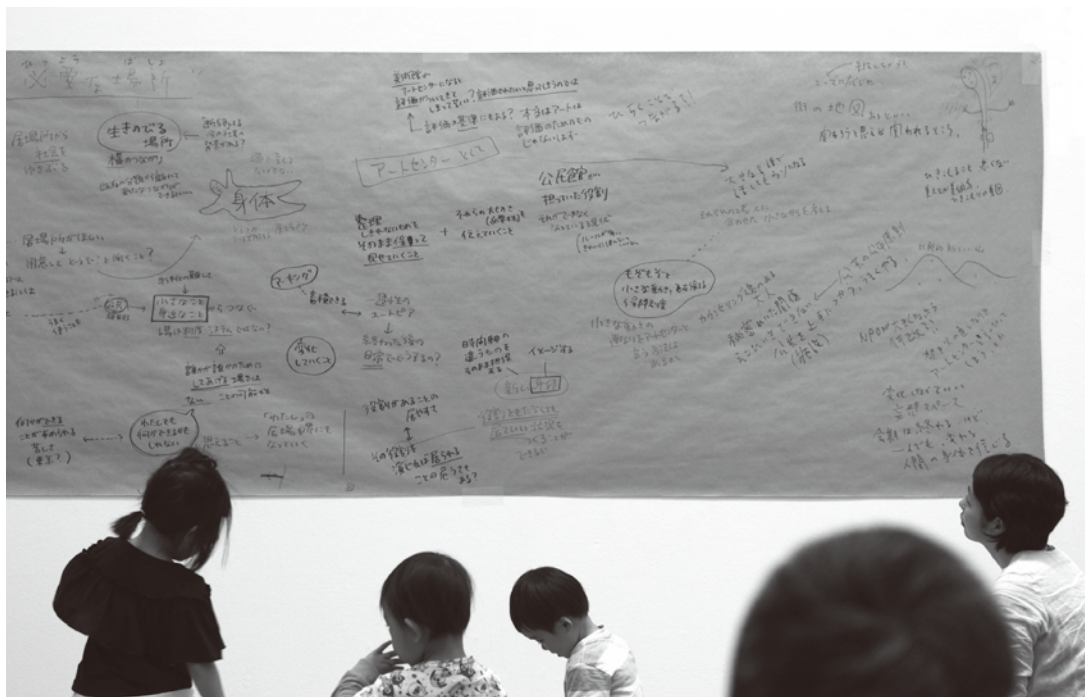
先ほど東京という話も出ましたけれども、機能／役割っていうものでどうしても固定化されていってしまっていて、そういう意味で言うと「いま、必要な場所」っていう問い方も、機能や役割で固定化するものではないようなあり方として考えていかなきゃいけないのかなってというのがひとつ。あと、私自身がアートを素人として楽しむときっていうのは、ふだんどうしても実社会の中で固定化された役割を演じなきゃいけないところを

切り替えられる新しいスイッチを見つけられたときに、一番の楽しみがあるわけで、何かそういう場であってほしいなと。これは別にアートだけじゃないのかもしれませんが、アートこそがいろいろな形で突拍子もないものが出てくることで、そういう新しいスイッチを見つけて、自分自身を変身させていける。私自身は1960年代生まれで、パフォーマンスも何もしませんけれども、何か心の中だけでもそういうふうに変わって行きたい変身願望ってありますか、常に同じ役割だけを演じきれない自分がいて、「生き延びる場所」っていう言葉がありますけれども、やっぱり生きづらさっていう中でほっと息がつけるような場所。で、おそらく地域の公民館などは、ふだんある関係の中に自分を見つけ出してほっとする場所でしょうけれども、やっぱりアートセンターとなると、違うところにほっとする、逃げ道とってはいけないのかもしれませんが、そういう場であってほしいなっていうのが、私の期待とありますか。そうしたことをプロセスとしてアーティストの方々がいろいろ見せてくれたり、こういうような場でいろいろな議論ができるってことは、とても素晴らしいことだなというふうに、今日東京から来てよかったなと思っております。

中崎：この仮設的な、開くプログラムなんですけれど、今日の座談会なんか司会の竹久さんの子どもがここでぐちゃぐちゃしながらもこんな真面目な話をしている感じとか、めちゃくちゃいいと思うんですよ。なんかそれって、水戸芸術館のスタッフとかボランティアの人とか、僕も含めてよく来ている人の中で、今後このイメージを共有していることの意味は大きいと思います。展覧会がガチとした中の、ちゃんとしたシンポジウムの中でも、お子さん連れだったり、何かガチャって音がしても、みんながそういうもんだと思って寛容な気持ちでいられて。ガチャンと音がしてみんながぎらっと見て、「あ、出なきゃ」みたいな空気じゃなくて、登壇者とかスタッフの人がそれを普通のこととして、展覧会とかここでの活動に出入りしていて、そういう空気感を全体で醸し出せるっていうか、お客さんもひっくるめてそういう共有感覚みたいなものを持つことってかなり大きい気がします。オルタナティブ部の話のなかでもこういった話で盛り上がったことがありました。そうなるといいなって、今日すごく思うトークだと思いました。

竹久:では、時間になりました。今日の座談会「いま、必要な場所」は、ラウンドテーブルを含めまして終わりとさせていただきます。引きつづきみなさんがそれぞれ持ち帰られると思うんですが、私たちも持ち帰って、今後どうしていくかという話を森山たちとしていきたいと思えます。

こうした語り合いの場というのはやはりすごく大切だなということを改めて実感しました。子どもがいながらファシリテートする難しさも実感しましたが(笑)(会場から拍手)、いやいや、すみません。また何かの機会でこういう語り合いの場はつづけていきたいと思えますし、引きつづき水戸芸術館現代美術センターはいろいろみなさんと一緒に活動していければと思います。今日はどうもありがとうございました。



文字起こし：笠井峯子(笠井編集室)

編集：竹久 侑(水戸芸術館現代美術センター)、笠井峯子

デザイン：石井一十三(水戸芸術館現代美術センター)

発行：水戸芸術館現代美術センター©2019

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

発行日：2019年10月

禁無断転載

「アートセンターをひらく 第I期」

2019年3月2日(土)―5月6日(月・振)

水戸芸術館現代美術ギャラリー

